

神風に頼った防衛

1945年4月に連合軍が沖縄に侵攻する頃には、日本の軍指導者たちにはほとんど手が残されていませんでした。日本はもはや海外からの天然資源を入手できず、絶え間ない空襲により武器やその他の重要物資の国内製造のほとんどが停止しました。戦闘訓練を受けた航空兵は、ほとんどが戦死したか行方不明となっていたため、不足していました。1944年10月、軍指導者らはレイテ湾の戦いで、戦況を変えるために神風特攻隊の編成を命令しました。その目的は、防御不可能な自爆攻撃を際限なく続けて連合軍海軍の士気を低下させることでした。

1945年5月、人吉海軍航空基地は沖縄を守るための神風特攻隊員を訓練する拠点となりました。他の基地からの航空隊員は、特攻という最終任務のために本拠地に戻る前に、九三式複葉機で急降下爆撃の訓練を受けるためにここに連れてこられました。多くの拠点から行われた神風特攻は、敵に壊滅的な被害をもたらしました：米海軍の艦船30隻が沈没、400隻が損傷、約1万人の船員が死傷しました。しかし、日本の空軍人と航空機の犠牲も同様に壊滅的であり、犠牲となった4,000人の航空兵と2,600機の航空機はかけがえないものでした。最終的には、ミュージアムの入り口にあるような複葉機練習機でさえ神風特攻に採用されました。こうした練習機は速度が遅かったものの、これらが木と布で作られていた

ことはレーダーによる探知を避けるのに役立ちました。ミュージアムの展示品には、写真や詩、そして最後の飛行の際にパイロットに「自分はひとりぼっちではない」と安心させるために与えられた記念品などが含まれています。